

Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia)

日本音楽集団

第一〇六回定期演奏会 ■ 合唱・声を伴う作品特集



昭和63年度文化庁芸術祭協賛公演

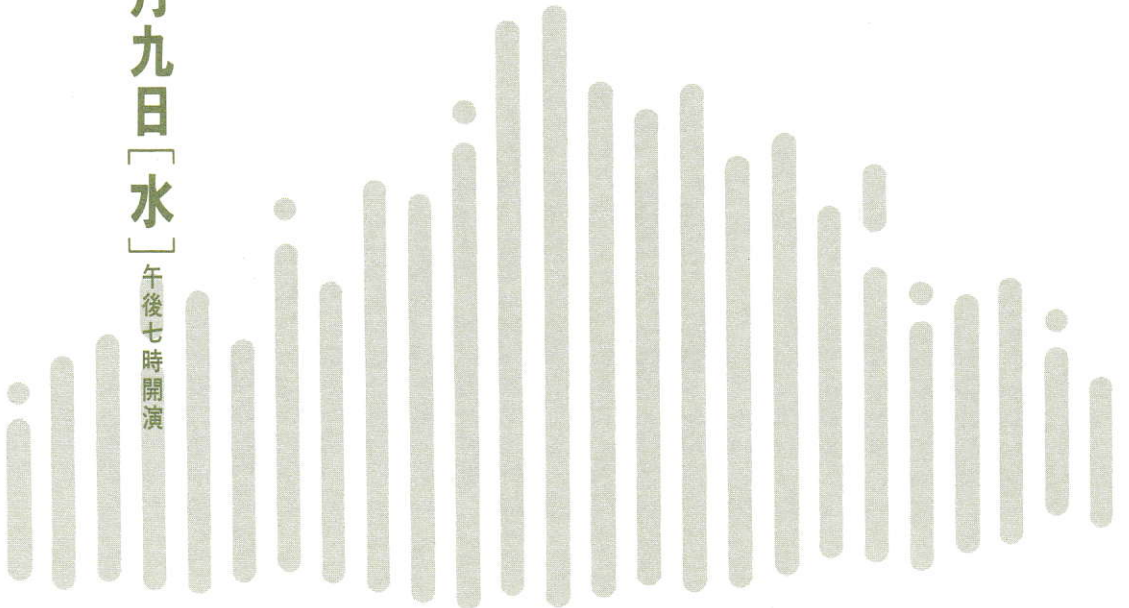
〈客演〉合唱 || コーロ・カロス

指揮 || 青島広志(枕草子)

一九八八年十一月九日〔水〕

午後七時開演

朝日生命ホール



一、子供の四季

長沢勝俊 作曲

[笛] 藤崎重康
 [尺八I] 坂田誠山・水川寿也
 [尺八II] 竹井誠・素川欣也
 [三味線] 太田幸子・田中悠美子
 [琵琶] 半田淳子・坂田美子
 [箏 I] 花房はるえ・久東寿子
 [箏 II] 大畠菜穂子・桜井智永
 [十七絃] 島崎春美・山田明美
 [打楽器] 尾崎太一・前田文男
 [合唱] コーロ・カロス
 [指揮] 田村拓男

二、ヤイレस्प

岡田京子 作曲

—夢が見せた・わが里—

[笛] 竹井誠 [尺八I] 三橋貴風
 [尺八II] 素川欣也 [尺八III] 米澤浩
 [低音三味線] 工藤哲子
 [琵琶] 田原順子
 [箏 I] 滝田美智子 [箏 II] 内藤洋子
 [十七絃] 佐藤由香里
 [打楽器] 細谷一郎
 [指揮] 田村拓男

三、枕草子

青島広志 作曲

—橋本治訳による— 女声合唱と邦楽器
のための (委嘱・初演)

[笛] 藤崎重康 [尺八] 三橋貴風
 [箏 I] 花房はるえ [箏 II] 滝田美智子
 [十七絃] 内藤洋子
 [打楽器] 細谷一郎・前田文男
 [合唱] コーロ・カロス
 [指揮] 青島広志

日本の四季のうつりかわりは特に美しいとされています。我がの祖先はこの四季のさまざまな変化に応じていろいろな民俗芸能を生み出し育ててきました。この曲は子供の目をおしてみた日本の四季をファンタスティックにえがいたものです。

1966年NHKの委嘱により作曲したもので、春、夏、秋、冬の四つの章よりできています。各章のあたりにそれぞれの季節感をもつわらべ唄や祭りのかけ声がうたわれ、それを受けて日本楽器のアンサンブルが自由な形でその季節の幻想をくりひろげていきます。わらべ唄のなかには思わず目をみはるような新鮮な子供の目が光っているものが沢山あります。日本の楽器は一見単調そうでありながら、実は大変こまやかに我々日本人の感情をあらわす術を心得ています。この曲のなかでもこの特性を大切にしながら子供達に日本の楽器の面白さを知ってもらいたいとつとめました。

都会に住んでいる我々にとって新鮮な季節感がだんだんと遠のいていってしまうのが現状のようです。もう一度私達を育ててきた国土と四季のうつりかわりをみつめなおしたいものです。
(長沢勝俊)

「ヤイレस्प」というのは、アイヌのユーカラに出てくる主人公の名前です。「ヤイ」は「自づから」、「レスプ」は「育てる」で、孤児を現わすそうです。曲はこの名前とは直接に関係はなく、むしろ副題につかったユーカラの言葉「夢が見せたわが里」に魅かれて作ったもので、これは私にとっての「夢が見せてくれたもう一つのふるさと」のつもりです。人は皆「生まれる前の世界」に帰っていく。その二つの世界のかげ橋として「ナムアマダブツ」という歌を使ってみました。全体に力強く明るい表現でありたいと思っています。

1975年の初演の時、作品の不出来を恥じて、二度と演奏はないものと思っていましたが、今回再演の機会を頂いて全面的に筆を入れることができました。いろいろ助言を頂きました指揮の田村さんと、集団の皆さんに、心から御礼申しあげます。
(岡田京子)

邦楽器のために作曲するのは2回目だが、前作は19歳のときの「総馬」(尺八2、十三絃2、十七絃)だから、すでに14年も前のことになる。ただ悪戦苦闘したという思い出だけが残っていて、邦楽器には迂闊に手を出さないと決意したのだったが、この度、合唱付きという、筆者にとっては幾分か手の内にある演奏形態での依頼だったので、誘惑に負けて、お引き受けしてしまって、現在、苦しんでいるのである。

橋本治の名訳によって、女声合唱は「現代ふう」に軽く歌われるが、邦楽器は、章によって編成を変えつつ、伝統的に用いられるはずである——とはいえ、作曲しているうちに、お互いに侵蝕作用が起り、合唱が重々しく、邦楽器が軽く扱われる

四、くるだんど

三木 稔 作曲

奄美の旋律による 混声合唱のためのカンタータ

- [笛] 竹井 誠
[尺八Ⅰ] 坂田 誠山・素川 欣也
[尺八Ⅱ] 藤崎 重康・水川 寿也
[尺八Ⅲ] 三橋 貴風・米澤 浩
[三味線Ⅰ] 太田 幸子・簗田 司郎
[三味線Ⅱ] 花房はるえ・工藤 哲子
[三味線Ⅲ] 坂井 敏子・田中悠美子
[十七絃] 宮越 圭子・大島菜穂子
[打楽器] 尾崎 太一・細谷 一郎・前田 文男
[合唱] コーロ・カロス
[指揮] 田村 拓男

ようになっているかも知れないが。

久し振りに、技術的に悪戦苦闘を強いられる作曲だけに、作曲の遅れで、演奏者の皆さんにご迷惑をかけていることをお詫びしたい。
(青島広志)

奄美は美しい南の島ですが、為政者と労働者の激しい相克の歴史が秘められています。奴隷たちは黒い雨雲の出現を見て「黒だんど」と叫び、雨の中でも止むことのない作業の苦痛を予見しました。この曲は、彼らが働き、嘆き、うさ晴らしをしたそのことばや旋律の断片を借りた、能動的な日本の音楽をめざす讃歌といえましょう。全曲は「くるだんどと掛声(いとう)」「船歌」「八月踊り」の三部分よりなりますが、続けて演奏されます。この曲の録音・初演などを通じて、日本音楽集団結成への熱い波が起きていった由緒ある作品です。

1963年南日本放送の委嘱によって作曲され、編成は篠笛、尺八3、三味線3、十七絃、打楽器3、及び混声合唱です。

<今、くるだんど>

世界中にある形をもった文化遺産は、皮肉なことに、専制者たちが被圧制者たちの犠牲の上に造り上げ、市民たちの血と汗で刻まれたモニュメントであることが極めて多い。その逆説的な事実がどれほど戸惑わさせられることか。

しかし、音楽にその常識は当てはまらない。優れた音楽作品の大部分は、反体制スピリットを持ったハングリーな音楽家たちが、市民の側において書き上げたものだといわれる。日本音楽集団の前史において、反骨精神や、力を秘めながら陽の当らぬ邦楽演奏家たちと鼓舞し合おうとする心情に溢れていた自分を想い起こすことができるのはまことに幸せである。苦痛の「黒だんど」は、同時に、明るい未来が「来るだんど」と叫ぶことであった。その燃える未来讃仰に支えられて日本音楽集団の歴史が刻まれていった。

今、世紀末的にソフィスティケートされた成熟社会を持つ日本で、そういった叫びは仲々聞かれない。しかし、いずれ熱気は戻ってくるものだ。自分自身をも超えて燃焼できる誰か、あるいは誰々たちによって必ず点火噴出するに違いない。<くるだんど>が叫びを秘めて演奏される時、きっと予見は響いてくる。未来を見て震えることができる。できうれば今回がそうでありますように。
(三木 稔)

青島広志氏プロフィール

1955年東京生まれ。東京芸術大学大学院修了。作曲を池内友次郎、矢野睦郎、林光に師事。合唱・オペラの分野で特に評価が高く「マザーグースの歌」「星からとどいた歌」などの合唱曲、「黄金の国」「火の鳥」を含む六作のオペラが特に名高い。他にも「モチモチの木」「いばら姫」などの管弦楽曲や吹奏楽曲も頻りに演奏されている。ピアニスト、指揮者、解説者としての活動も多岐にわたり、現在NHK「ゆかいなコンサート」ラジオ日本「クラシックコンサート」レギュラー。東京芸術大学、都留文科大講師、日本現代音楽協会、作曲家協議会会員、東京室内歌劇場運営委員でもある。

「コーロ・カロス」プロフィール

昭和56年、合唱指揮者栗山文昭のもとに結成されたアマチュア合唱団。主にルネサンスの曲を歌う室内合唱団として生まれたが、青島広志との出会いで「演技しながら歌う」ことの楽しさに開眼。ルネサンス、ヒンデミットやペトラッシなどの現代作品、三善晃、青島広志の4本柱をプログラムにした年1回の定期演奏会の合間に、ジョイントコンサートやオペラに出演するなど幅広い活動をしている。「野次馬的無鉄砲集団」と常任指揮者が呆れるほど好奇心の強い団員が揃っているため、今日の出演をきっかけに何人かは、邦楽器の魅力にとりつかれてしまうことだろう。

「コーロ・カロス」—今回の出演メンバー—

〔ソプラノ〕	井口恵美子 丸山 雅子	井桁由美子 森沢美佐子	岩瀬 裕子 渡辺 育子	中島 美穂	堀野 直美
〔アルト〕	江沢 睦子 堀内みずき	勝野 寿子 山口 珠江	草場 澄江	塚本由美子	中田 美和
〔テノール〕	有賀 達成 横山 琢哉	井桁 嘉一	石井 成和	木内 博和	草場 康裕
〔ベース〕	有馬 秀雄 榎 幹雄	大場 点 山本 信夫	楠本 峰生	小平 修三	佐藤 正史

団員募集!!

日本音楽集団では、来年3月に団員の募集を行う予定です。
詳しくは事務局にお問合せ下さい。

日本音楽集団 〒151 東京都渋谷区笹塚3-17-1 ☎03-378-4741



オリジナル立奏台

箏

二十絃箏

箏を受するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(792)8481



アイ・エム・エス

●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣

〒167 東京都杉並区上荻 2-21-25
オリオンシャトー1F
PHONE. 03-397-2292